

# ブーバーとロジャーズの対話に関する一考察

—セラピストとクライアントの対等性の問題—

今井伸和

A Study of the Buber-Rogers Dialogue:  
On the Problem of equality between therapist and client

Nobukazu IMAI

## はじめに

20 世紀において最も影響力のあった思想家の一人マルティン・ブーバー (Martin Buber, 1878-1965) と最も影響力のあった心理学者の一人カール・ロジャーズ (Carl Rogers, 1902-1987) が、1957 年ミシガン大学で対話をおこなった。この対話において、両者の根本的な相違点は何だったのか、ブーバーは本当は何を言いたかったのであろうか、ということを考察してみたい。とくに本稿では、両者の対話において論点のひとつとなった対等性の問題を取り上げ、検討してみた。対話におけるロジャーズとの違いを際立たせることによって、ブーバーの真意を浮き彫りにすることが本稿のねらいである。

論述の順序としては、まず第一章では、両者の対立点について整理することに主眼をおいている。それを受けて、第二章と第三章では、ブーバーがロジャーズに対して言いたかったことを明らかにしようと試みた。以上を足がかりにして、第四章では、対話において自己が世界に開かれる事態について考察した。

両者の対話を収めたテキストにはいくつかの版があるのだが、そのなかで本稿は、*The Martin Buber-Carl Rogers Dialogue: A New Transcript with Commentary* (Rob Anderson and Kenneth N. Cissna ed., State University of New York Press, 1997) を用いた。その理由は、この版が、現代の最新の音響機器を利

用し、あらたにテープおこしをしている点、その過程で既存の版の訂正を詳しく行っているという点で、現時点で最も信頼がおけるテキストであるからである。なお、この版では、発言順に通し番号がわりふられている。本稿で引用する際に用いた数字はそれに従っている (たとえば、*Dialogue*, 126 というように引用箇所を示した)。その他の著作からの引用については、そのつど注をつけている。

## 第一章 両者の対立点の整理

ロジャーズとブーバーとの対話において、その中心のテーマとなったのが、セラピストとクライアントが対等であるのか、そうでないのかという問題であろう。ロジャーズは、対話のほとんど全体をついやして、セラピストとクライアントの対等性を力説し、セラピーと「我-汝」関係の同質性について、ブーバーの同意を求めている。それに対してブーバーは、セラピストとクライアントは対等ではなく、根本的に相違していると終始一貫して主張した。一見すると、この対話はすれ違いのまま、ものわかれに終わってしまっているように見えなくもない。では、もう少し詳しく見ていこう

まず、ロジャーズの主張を要約すれば、以下のとおりである。治療的関係において最も治療効果のあった瞬間は、ブーバーの言う「我

「汝」関係と非常に似ているとされ、セラピストがクライアントのありのままを受容することにより、そこには人格と人格との出会いが生じ、セラピストとクライアントがともに変えられるとされる(cf. *Dialogue*, 27)。

次に、それに対するブーバーの主張は以下のとおりである。すなわち、クライアントがセラピストのもとに助けをもとめてきたのであり、当然ながら、セラピストがクライアントに助けを求めにきたのではない。セラピストは多少なりともクライアントを援助することができるが、クライアントがセラピストを援助することは決してないのである。また、セラピストはクライアントの「ありのまま」が見えているが、クライアントはセラピストのありのままを見ることはありえない。それは程度の差のみならず、本質的な違いである、ということである(cf. *Dialogue*, 34)。

さらに、ブーバーはひとつの例を挙げ、クライアントは、セラピストとは違って、自分の立っているところ以外には立つことができないということを説明している。すなわち、クライアントが立場を替えて、セラピストに次のように質問したとしよう。「先生、あなたは昨日どこに行きましたか。そうですか、あなたは、映画に行ったのですね。映画は何を見たのですか。印象はどうでしたか。」言うまでもなく、クライアントがこうした質問をすることはありえないとブーバーは言うのである(cf. *Dialogue*, 50)。

これは、簡単に言えば、役割・立場の違いである。普段われわれが友人と会話を交わす場合を考えてみよう。その際、質問をする側とされる側といった役割は、頻繁に入れ替わるのが常である。しかし、通常、セラピーにおいて質問をする側はセラピストであって、クライアントではない。クライアントがセラピストの側に立って、質問をすることはありえない。なぜなら、セラピーで問題になっているのは、まさにクライアントの問題であり、セラピストのそれではないからである。クライアントは、セラピストの問題には関心がな

く、どうしても自分の問題にのみ関心が向かざるをえないということである。一方、セラピストもセラピーにおいて自分の経験に関して主題として取り上げることは、ほとんどないであろう。つまり、セラピーという関係においては、「対等な者どうしが対等な地平に」立つことはありえないのである(cf. *Dialogue*, 44)。このように、セラピストとクライアントの関係は、そもそもその成立の前提条件からして、対等ではありえないということが言える<sup>1</sup>。

以上見たように、ロジャーズは、セラピストとクライアントは対等でありうると主張し、一方、ブーバーは、両者がどうしても対等にはなりえない原理的な問題がそこには潜んでいると反論する。したがって次章では、なぜ対等ではありえないのかという根拠をさらにほりさげて考える必要があるであろう。そのことによって、ブーバーの最も言いたかったことが明らかにされるのではないだろうか。

## 第二章 方法化の問題性-対話をしつらえることはできない-

ブーバーはセラピーの対等性を否定するが、その真意はあまりはっきりとは語られていないように見受けられる。それによって、次のような、ブーバーに対する批判的解釈も出てくるのである。

ブーバーは、クライアントを無力な弱者、一方的に援助されるままの存在として、ステレオタイプのなとらえ方しかしていないのである。この点は、援助関係を外側から「状況」としてしかとらえていないブーバーの限界である<sup>2</sup>。

ブーバーはセラピーに関して、傍観者として、単純に「外側」から眺めていて、発言しているというわけである。しかし実際には、ブーバーは、セラピーの当事者どうしつまり

セラピストとクライアントを外側から、第三者として眺めているのでは決してない。それを明らかにするために、少し長くなるが、ブーバーの発言を次に引用したい。

私があなた〔ロジャーズ〕に同意できない点は、私が全体的状況を見なければならぬということ、あなたの経験と彼〔クライアント〕の経験とを見なければならぬということに関してなのです。ご存知の通り、あなたのほうは彼に色々としてあげて、ご自分と対等の位置に彼を立たせます。あなたは、彼とあなたの関係の中で、彼の窮乏を補います。あなたは、彼を—いくぶんか—構成するのです。私から言わせてもらえれば、あなたはいくぶんあなたの満ち足りたものから彼に欠けているものを、ただ、この一瞬の間だけ、いわばあなたと同等の地平に、立つことが可能となるために、彼に与えるのです。しかし、それでさえ—まさに—わずかにふれあう点なのです。それは一瞬しか続かない点なのです。私が見る限り、それは一時間もつづく状況ではありません。それは数分の状況です。そして、この数分間はあなたによって作られたものです。けっして彼が作ったものではありません。(Dialogue, 84)

セラピーの内側から観るとか外側から観るといった点が問題の核心でないことは言うまでもない。むしろ、ブーバーが問題視しているのは、この「状況」がセラピストに差配可能なものであるという点である。反対に、クライアントには差配不可能である。ロジャーズがクライアントとは対等の位置に立っているといくら主張しても、対等性をしつらえているのは一方のセラピストの側だけなのである。その時点で既に、必然的に対等ではありえない。なぜなら、対話する相手によってしつらえられた対等性とは、もはや真に対等性と呼ぶに値しないからである。

以上見たように、しつらえるということの問題性をブーバーは言いたいのではないか。しかしそうだとすると、セラピーの方法化それ自体に問題があると言おうとしているのではないであろう。セラピーが人を援助する療法であるかぎり、方法が重要であるのは言うまでもない。たまたま援助することに成功しただけでは、それを次に利用することはできないであろう。それを普遍妥当的に用いる方法が確立される必要がある。しかしそれに対して、ブーバーの言う対話は決して方法化されえないものである。それは恩寵であるのである。「私が汝に出会うのは恩寵によってである—探し求めることによっては、汝は見いだされない」ということである(Bubers Werke, I-S. 85)。

出会いとか対話を目的化するあまり、その真正さが壊されるということがある。ここでわかりやすい例を挙げよう。それは精神医学者のフランクフルが、エンカウンター・グループについて述べているものである。エンカウンター・グループを研究している学生がフランクフルのゼミナールで次のように語った。「私は多くの人から友人になってくれるように頼まれました。……彼らを抱きしめたいとも、愛しているとか友達になりたいとかを伝えたいとも、心からは感じられませんでした、とはいうものの、そうしました。……強いて、感情的になろうとしました。しかし徒労でした。感情的になろうとすればするほど、ますますそうはできなくなったのです。」<sup>3</sup>

この、エンカウンター・グループについての発言は、出会いというものを目的化すると、その自発性がそこなわれ、ぎこちないものになることをよく表していると思われる。それとは異なり、真の対話は差配を許さない。ブーバーは「私が対話と呼ぶものに関して、そこには本来的に驚きの瞬間がなくではなりません」(Dialogue, 92)と述べている。対話は、それが作り出されたものではないからこそ、そこには驚きがあるのだと言えよう。

### 第三章 ブーバーにおける「悲劇」

前章で見たように、ブーバーはセラピストとクライアントの立場の違いを強調する。しかし、ブーバーが立場の違いだけではなく、とくにその変更不可能性を指摘している点に着目すべきであろう。「彼には、あなたとの話し合いの間、自分の立場を変更することができません」(*Dialogue*, 50)と彼は言うのである。確かに、セラピストとクライアントのそれぞれが立場を簡単に変えるはずはないし、変えることなどできない。そういう意味では、けっして対等ではないのである。しかし、ことはそれだけで済まず、ブーバーは立場の違いを変えることができずに対等ではないことを悲劇と見なしている。具体的には、ブーバーはセラピーの「状況」を「悲劇と呼ばれるものよりも恐ろしいもの」(*Dialogue*, 44)と述べ、セラピーを「悲劇によって阻害されている対話」(*Dialogue*, 62)とまで言っているのである。ここで「悲劇」という言葉が持ち出されたのは、やや唐突な感をわれわれに与えるであろう。いったいどうしてセラピーの状況が悲劇であると言えるのだろうか。このことについてはどう考えればいいのか。

ブーバーが悲劇という場合は、そこには特別な意味が込められている。すなわち、悲劇ということで彼の念頭にあるのは、次のような事態である。

二人の者が、それぞれまさにあるがままで、互いに対立して生きている場合、両者の本当の対立とは、「善い」意志とか「悪い」意志というような対立ではなく、実存と実存との恐るべき対立なのである。(*Bubers Werke*, III-S. 1258)

ブーバーによれば、悲劇とは、両者を調停しうるような手だてがまるでなく、どちらか一方に加勢することもできないような状況のことをいう。ブーバーのこうした悲劇観は彼

の実際の体験から生じてきたものなのだが、その一例を以下に挙げてみよう。

ブーバーが悲劇というものを最初に自覚したのは、彼が24歳の時であった<sup>4</sup>。ブーバーも参加していた、1902年の第6回シオニスト大会において、シオニズムの指導者テオドル・ヘルツルが、反対派のダーヴィス・トリーチスに対して謂われない非難をして、トリーチスの名誉を傷つけた。トリーチスの友人であったブーバーは、この名誉毀損に対して、ヘルツルに抗議をおこなおうとしたが、ヘルツルの、ユダヤ民族の国家再建という信念に燃える姿を見て、結局、一方の側だけに味方することは不可能であったと述懐している。

「一方の側、会場には、私の友人であり、同志である一人の人間が傷つき、公に加えられた不正に苦しんでいる。[…中略…] 一方こちらには、その不正の張本人がいる。[…中略…] とはいえ、彼は、誤ったけれども、依然として私の指導者であった。彼は熱意に取り憑かれていた。信念に対する熱意に燃えていたのである」(*ibid.*)。

ブーバーによれば、そこでは各々の主張の「もっともらしさ」(*such a thing as being in the right*)ということとはもはや通用しない。そこで唯一通用するものは、「もっともらしさ」よりもはるかに偉大なもの、すなわち「正しさそのもの」(*the right*)なのである(*ibid.*)。論理的な正当性あるいは方法としての適正さ、さらには倫理的な正・不正などがもはや何の効力ももたない悲劇の状況においては、それらを超えた何かが要請されているということである。

セラピストとクライアントの関係についても、「悲劇」という言葉が用いられる限りにおいて同様に、それぞれの立場を変えることができないような状況、抜きさしならない対立の深淵とブーバーは見なしているのだと言える。ロジャーズの言うようには、対等性ということでは済まされない事態を、ブーバーはセラピストとクライアントの関係に見てとるのである。つまり、それぞれが決して立場を

変えることができず、対等にはならないセラピストの実存とクライアントの実存の対立の深淵を「悲劇」という言葉でブーバーは指しめそうとしていると言える。

では、論理や方法、倫理の原則などが通用しない悲劇的状况に対して、われわれはいかに対処すればよいのであろう。悲劇を克服する方途は全くないのであろうか。ブーバーはこの問題についてどう考えているのであろう。

ブーバーは悲劇に対する処方箋を持っていないと言明する。「私は教説を有しては無い。こうした現実を指ししめすのが私の役割である」(ibid.)。しかし、治療的關係について、ブーバーは次のようにも述べているのである(ついでに言うと、この引用は、ブーバーと親交があった精神療法医ハンス・トゥリュープの著作『出会いによる癒し』の序としてブーバー自身が書いた文章の一節である)。

人間と人間とが向かい合っている直接性においては、自分の殻が突破されなければならないし、突破されうるのである。そして、他者性—つまり自分の心には編入しえない他なる世界—との関わりにおいて、病気になった者には、癒されて変化した関わりが開かれなければならないし、開かれうるのである。心が病んでいるだけではない。いつも同時に、間なるもの、自分の心と他者との間の関係も病んでいるのである<sup>5</sup>。

要するに、問題は、自己の殻が突破され、世界に対して開かれうるかどうか、ということである。したがって、次章では、悲劇克服の方途としての、自己を世界に開くということについて具体的に検討する。

#### 第四章 自己を開くということ

セラピーにおいては、もちろん程度の差もあるが、自己を開くということが阻害され

ている。対話において重要なことは、自己が他者に対して開かれているかどうか、ということである。「問題は、彼が開かれうるかどうか、彼が自分自身を開くかどうか、ということなのです」(Dialogue, 76)。ブーバーはパラノイア<sup>6</sup>という病気を引き合いに出し、そのことについて説明する。

彼は自分自身を開きません。しかし自ら閉じているのではありません。彼は閉じられたままです。彼をして閉じさせる何かが存在しているのです。(ibid.)

これはパラノイアという特別な症状に関わる問題ではなく、人間一般の問題でもあるとブーバーは言うのである(ibid.)。ブーバーが悲劇と呼んでいるのは、対等性などとはもはや言っていられない、閉じられた自己の孤独性であり、世界に対して開かれる手だてがないという戦慄すべき事態のことである。パラノイアとまではいかないまでも、諸々の事情で心を少しも開かない人にわれわれが出会った場合、その人と関係を結ぼうとしてもその手だてのなさに戦慄し疲弊した経験が一度ならずあるであろう。

では逆に、自己を開くという事態は、ブーバーにおいていかに考えられているのであろう。おのれを開くということに関連して、ブーバーが、樹の存在のいのちにふれるという事態を述べている。それを以下に引用したい。

樹の、いのちに充ちたあの全体性と統一性は、樹を単に研究するだけの人間のいかに鋭い凝視に対しても拒否的に閉ざされたままであっても、汝を言う人間の視線に対しては開かれるのであり、その人間がその樹に向かいあって存在するときこそ、樹はまさしくそこに存在するのである。彼は樹がその全体性と統一性を開示することを可能にし、そしてそのとき、存在である樹がそれを開示するのである。(Bubers Werke, I-S. 163)

樹の生ける全体が開かれるということについて述べたが、「開かれる」という箇所は、受動態で日本語に訳してはいる。というのも、原文では、sich erschließen であり、再帰代名詞が用いられ、ふつう文法的には受動態で訳されるところであるからである。けれども、直訳すれば文字通り、その樹がおのれを開示するという意味である。つまり、世界が自ずからおのれ自身を開示するという事態であると言える。

樹のいのちにふれるということは、われわれが、そこに心を傾け、そこに自己の全存在でもって、その樹を厳としたほかならぬこの他者として、つまり「汝」として承認するときにはじめて可能である。そのときに、樹がおのれの生きた全体性と統一性、つまり生ける存在の確実性を開示するのである。それを可能にするのは、「汝を言う人間」である。「汝を言う人間」がまさにそこに存在しているからこそ、その樹は生ける全体性と統一性を開示することができるのであり、この「汝を言う人間」のことをブーバーは人格と考えているといえる。

しかし、われわれは樹の生ける全体を自我によって拘束しよう (inschließen) とするのである。このような世界に対する態度が、先に述べたような、「我-それ」における「我」の態度である。それは、世界と真に出会うというのではなく、世界を自分の心の一部として所有する人間のことである。

私に向かいあって存在する存在はすべて、私という自我によって〈拘束〉され、このような自我の拘束においてはそれとして所有されるのである。私が、何とかこの存在を我がものとし、自分の心の一部たらしめようとする意志を断念し、存在の拘束されえない他者性を自覚するときにはじめて、私にとってこの存在は汝となるのである。(Bubers Werke, I- S- 571)

世界を自分の心の一部として所有するとは、簡単に言えば、それは、世界の私物化ということである。ブーバーの術語に従えば、こうした世界に対する態度は「我-それ」における「我」の態度である。

とはいえ、樹との関係と違って、人間との関係の場合は、もう少し複雑であろう。すなわち、こちらが相手に心を傾け、相手と向かいあって、そこに存在したとしても、相手がそこに居合わせるかどうかは、こちら側ではどうすることもできない。相手の世界は閉じられたままであり、そこに居合わせないかもしれない。対等性ということだけでは、済まないということである。しかし、ブーバーは次のように述べている。

両者のいずれも自分の見解を放棄する必要はなく、ただし、両者は、思いがけずに何かあることをなし、思いがけずに何かあることに会うことによって、すなわち結びつきに会うことによって、見解という法則がもはや通用しない領域に歩み入るのだ。両者はそこでもやはり自分たちが制約された存在であるという運命を耐えしのばねばならない。しかし、滅することなきひとつの瞬間に、その運命を解きあかすことはできるのであって、そのときに両者は自分に与えられている運命をきわめて尊いものと思うのである。両者はすでに前もって出会っていた。だから、両者の心が互いに向かいあった瞬間からは、相手の存在を現前化しつつ、互いに真に相手に語り、語りかけることができたのだ (Bubers Werke, I- S. 178)

心と心に向かい合う瞬間が、相手が物であれ人間であれ、あるのである。そのことをより具体的に明らかにするためには、白洲正子の次の文章を引用するのが適切であろう。「五、六十年もやって、やっと骨董にも魂があるってことを知ったの。その魂が私の魂と出会って、火花を散らす。といっても、ただ、どきどきするだ

けよ。人間でいえばひと目惚れっていう奴かな。」<sup>7</sup>魂と魂が出会うためには、「今まで得た知識や情報を全部忘れて、裸の心でもものに接する。そして相手が心を開くまで黙って待つのである」とも白洲は述べている<sup>8</sup>。対等性ということが重要な契機ではないのである。重要なのは、相手がおのれを開くのを願って待つという祈りにも似た姿勢であるのである。

「見解という法則がもはや通用しない領域」とは、これまで述べてきたことから明らかなように、悲劇の領域にほかならない。しかし、その悲劇は両者の結びつきの端緒でもありうるのである。「この荒涼とした夜には、いかなる道〔方法〕も示されていない。できることと言えば、夜明けがおとずれ、誰も思ってもみなかったところに道が見えるようになるまで、心を準備して耐えしのぶ者を助けることなのである (Bubers Werke, III-S. 1261)。」悲劇にはおいては、両者が見解の一致をみることもなく、また両者が対等になることも決してない。われわれはそれらを耐えしのばねばならないのである。悲劇は消失しない。しかしながら、悲劇が悲劇のままで、自己が世界に開かれるということも可能であるのである。

## おわりに

本稿は、ブーバーとロジャーズとの対話における、対等性の問題についてあつかった。ブーバーがそこで本当に言いたかったことは、ひとつには対話はしつらえることができないということ、また、セラピストとクライアントの関係が対等性ということだけでは済まされない悲劇的要素を含んでいるということであると論じた。さらに、その悲劇の克服は、世界に対して自己が開かれることによって可能になるということを明らかにした。

さて、ロジャーズとブーバーには、本稿では論じることができなかった重要なテーマがまだいくつもある。たとえば、それらのひと

つとして、「受容」と「承認」の異同が挙げられるであろう。ロジャーズがクライアントのありのままを「受容」することの重要性を説くのに対して、ブーバーは、受容では不十分であり、ありのままという現実性のみならず、その人間が生成するように定められている姿をもふくめて、受容しなければならず、それは「承認」と呼ぶべきであると言う (cf. 112)。また、ブーバーの「悲劇」観について、本稿ではあまり詳細に論じることができなかったが、それはブーバーの思想を理解するうえで重要な概念であると考えられる。これらの残された問題についての考察は、別の機会に譲りたいと思う。

## 註

<sup>1</sup> ブーバーは、『我と汝』のあとがきにおいて、精神療法に関して次のように述べている。すなわち、それは「その特質が維持されるためには、まさにその特質を然らしめるところによって、完全な相互関係へと発展することが許されぬような我-汝の関わり」であると。なお、このあとがきは、ロジャーズとの対話の直後に書き加えられたものである。Vgl., Martin Buber, *Werke*, 3 Bde., (Kösel-Verlag und Verlag Lambert Schnerder, 1962-1964), Bd. I- S. 166. なお、これ以降、ブーバーの著作集からの引用は、たとえば *Bubers Werke*, I- S. 166 のように、略して表記する。

<sup>2</sup> 稲沢公一「援助者は『友人』たりうるのか-援助関係の非対称性-」、古川孝順編著『援助するということ』(有斐閣、2002年)所収、159頁。

<sup>3</sup> Viktor E. Frankl, *Der Mensch vor der Frage nach dem Sinn* (München, 1995), S. 41.

<sup>4</sup> cf. Paul Arthur Schilpp and Maurice Friedman (ed.), *The Philosophy of Martin Buber* (La Salle, Illinois, Open Court, and London, Cambridge University Press, 1967), p. 17.

<sup>5</sup> Martin Buber, *Nachlese*, 3. Aufl. (Gerlingen, Verlag Lambert Schneider, 1993), S. 132.

<sup>6</sup> 日本語では「妄想症」と訳される。系統的な妄想形成を主徴とする病態。発祥は40-50歳くらい。数年かけて、徐々に発展し、慢性の経過をとる。『縮刷版 精神医学事典』(弘文堂、2001年)参照。

<sup>7</sup> 白洲正子『白洲正子全集』第十三巻(新潮社、2002年)、512頁。

<sup>8</sup> 同書、513頁。